妖精に魅入られた男

鈴木颯手

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルートヴィヒ・フォン・アールスハイドは妖精の力にあこがれた。彼は王族の地位を捨てる代わりに領地を得てそこで妖精の研究を行った。魔人騒動で彼はため込んだ力を一気に開放した。

※賢者の孫とフェアリーゴーンのクロスオーバー作品です。賢者の孫の世界観にフェアリーゴーンの要素をつぎ込んだ感じの作品にしたい。

目次

001・全ての始まり ―― 1
002 ―― 5
003・入試 ―― 11

００１・全ての始まり

「お待ちしておりました、ルートヴィヒ殿下」
「ああ」
　アールスハイド王国北部にあるとある森。現地の人すらほとんど立ち入らない森は人の手が入らない事で豊かな自然を残していた。そんな森に数人の人間が入っていた。上等な生地で出来た服に身を包んだ男と同じような服装をする数人の大人の男性である。彼らは青年を案内するように森の奥に入っていく。
「本当にいるのだな？」
「はい、間違いありません。ですが確保しようとして失敗し５名が死亡、１８名が重傷を負いました」
「妖精兵も３名だが連れていたはずだろう？そいつらはどうした？」
「全員死亡者の中に入っています」
「何たることだ」
　男、ルートヴィヒは部下の報告に頭を押さえる。しかしすぐに頭を振り声をかける。
「現状は？」

「何とか抑え込んでいますが運ぶのは難しいです」
「何としても運ぶのだ。ここではまともな移植手術が出来ん」
「ですが……」
　その時、獣の咆哮が聞こえてくる。それもルートヴィヒ達が向かっている方角から続いて何かが壊れる音と銃声、男の悲鳴の様なものが聞こえてくる。それを受け周りの部下たちはルートヴィヒを囲むように配置につき銃を構えた。
「……どうやら、捕獲には失敗したようだな」
「殿下！ここはお引きください！」
「無駄だ、既に手遅れだからな」
　瞬間、ルートヴィヒ達の前に巨大な獣が姿を現した。人間を軽く超える巨体に周辺の木の幹と同じ太さの腕、人間を軽くかみ砕けるであろう鋭利な牙を備えた顎。
「ほう、想像以上の妖精成体だな」
「殿下！」
「■■■■■■■■■■■■■■■■■ッ!!!!!!」
　獣は一鳴きすると覆いかぶさるようにルートヴィヒに襲いかかる。そしてそのまま部下事体で押しつぶした。押しつぶされた人間だった肉片が周辺に散らばる。獣、妖精成体は体を起こし周辺を見渡した。

「ほう、あの一瞬で俺が潰されていないと気づいたのか。意外と賢いんだな」
「■■ッ!!!!」
妖精成体は声のした方を見る。そこにはいつの間にか木の枝に腰を下ろし妖精成体を見下ろすルートヴィヒの姿があった。
「■■■■■■■■■■■■ッ!!!!」
「ふん、流石にこれ以上暴れると困るのでな。少し大人しくしてもらおうか」
ルートヴィヒは右手に炎の球体を作り出すと向かってくる妖精成体に放った。

この世界には魔力を制御しきれず魔物と化す獣とは別に古くから存在する獣がいた。それは妖精成体または単純に妖精と呼ばれるものである。半透明の妖精原体に憑りつかれた獣が姿を変えた姿でありその力は魔物をはるかに超え時には魔人すら超える力を持っていた。しかし、妖精成体になるために必要な妖精原体の激減に伴い妖精成体も数を減らし今ではほとんど姿を見なくなっていた。

　しかし、完全に消えたわけではなく今でも人が入らない森の奥では存在しており民間伝承などで語り継がれていた。
「かつて人々は言った。妖精はこの世のバランスを司っていると。妖精が姿を消せば世界のバランスは崩れると。……実に愚かな事だ」
「では妖精がほとんど消えた今の世はバランスが崩れているというのか？そんなわけない。こうして今も人間の世界は続いている」
「ここは既に妖精の世界ではない。人間の世界だ。ならば妖精をどう扱おうとも人間の勝手であろう」
「俺は必ず成し遂げよう。魔法に現を抜かす今の世に新たな風を吹き込むのだ！」

002

アールスハイド王国ゼスキア公爵領公都ロンダキア

「妖精武器が奪われた?」

妖精成体を捕獲したルートヴィヒ・フォン・ゼスキア（旧姓アールスハイド）にもたらされた報告は意外な物であった。

妖精武器は妖精の力が込められた強力な武器でありこの世に七つしか存在しない。そしてそれらはルートヴィヒより功績が認められた最強の7人に与えられていた。

まさか奪われるとは思っていなあったのである。

「はい、奪われたのはモルテラントで保有者ハリスタンは路地裏にて死体で発見されています」

「馬鹿な、奴とて7騎士の一人だ。そう簡単にやられるなど……」

「付近にはグイ・カーリンの者が確認されています。恐らく……」

「直ぐに全領境を封鎖しろ!あれが世界に出回る事だけはあってはならん!」

「はっ!」

妖精武器、ひいては妖精を使いこなせているのはゼスキア公爵領のみである。このア

ドバンテージは大きくルートヴィヒはこの保持を最も厳重に行っていた。
妖精をその身に宿す妖精兵程度ならまだ良かった。妖精兵にする方法が漏れない限り問題ないからである。しかし、妖精武器はそれだけで強力な力を持っていた。
部下が部屋を出て行くのと入れ替わるように一人の老兵が姿を現す。彼もまた７騎士の一人であるレイ・ドーンである。
「閣下、どうなさいましたか?」
「ハリスタンの馬鹿がマフィアに殺された挙句妖精武器を奪われた」
「それは……大変ですね」
レイ・ドーンは事の深刻さが伝わったようで眉を潜めていた。
「……この地を賜り早２０年近くが経過した。俺ももうすぐ４０になる」
「私はその時閣下の護衛として傍におりました。今でもその時のことを昨日の様に思いだせます」
「そこからここロンダキアを発展させ妖精の力を使えるようにして漸く最終段階まで来る事が出来た」
「我が心は閣下と共にあります」
「レイ……」
忠臣の言葉にルートヴィヒは笑みを浮かべた。

「……ところで、なんのようだ」
「はっ、実はフリードリヒ殿下が王都の高等魔法学院の試験の為にもうすぐに向かうとの事です」
「む、もうそんな時期か」
ルートヴィヒの長男フリードリヒは魔法の才があり成人を迎えた（１５歳）ため高等魔法学院に試験を受ける事となっていた。フリードリヒはこれまで領地から出た事が無かったため領外の事を知るいい機会と受け取ったためである。
「確か護衛はアウラーだったか？」
「はい」
アウラーことネイン・アウラーは違法妖精取締機関ドロテアの局長であり７騎士の一人であった。本来彼女も多忙でフリードリヒの護衛が出来なかったが手が空いてないのと適任者の不在から選ばれる事となった。
「アウラーもかなり渋っていたな。まぁ、それならリスカーに任せると言ったら引き受けてくれたがな」
「彼の者には不適任ですからな」
彼らの言うリスカーとは７騎士の一人ビーヴィー・リスカーの事である。戦争、戦闘を何よりも楽しみにしている傭兵でとても護衛を出来るとは思えなかったしさせたく

はなかった。因みにレイ・ドーンにはこの後帝国との領境に行ってもらうため無理であった。
「なら息子に激励を送るとするか」
そう呟くとルートヴィヒは立ち上がり執務室を出て行った。

「殿下、到着しました」
「分かった」
フリードリヒはネイン・アウラーの言葉に頷き車を降りる。フリードリヒは表には出さないようにしていたがついつい周りを見回してしまう。彼にとって王都は初めて訪れるからだ。
「ここが王都か。……アウラーよ。ロンダキアの方が栄えているように思えるのだが……」
「実際そうでしょう。ロンダキアではあらゆる最新技術が集まる都市ですので」
「へぇー、確かその様にしたのも父上だったな。やはり父上は凄いな」

フリードリヒはアウラーの言葉を聞き改めて父の凄さに驚く。自分では到底真似は出来ない。そう思いつつ彼の心には一切の負の感情は湧かない。それだけ父の事を純粋に尊敬していたからである。

「試験が終わるまで待っていますので殿下は自分の持てる力全て使って頑張ってください」

「ああ、父の名を傷つけないように頑張るとも！」

フリードリヒはそう言って学院の方へ向かっていく。それを見送ったアウラーは心の中でため息をつく。

「(やれやれ、この視線にはまだ慣れんな)」

アウラーは先ほどから付近の視線を惹きつけていた。正確にはアウラーや彼女らが乗っていた車にである。ゼスキア公爵領以外では車は存在していなかった。最近漸く車の生産が各地で行われているがゼスキア公爵領の様な性能の良い車はまだ存在していなかった。

そこでふと、何か違う視線を感じた。アウラーがそちらの方に目を向ければこちらに驚いたような顔をしている青年の姿があった。青年は車というものを見て驚いているよりも何でここにあるんだという驚きをしているようにアウラーは感じたがゼスキア公爵領付近の者か？と思い直ぐに視線を逸らし殿下の帰りを待った。

「（嘘だろ!?何でこの世界に車なんてあるんだ!?まさか、俺以外にも転生者が……）」

その青年、シン・ウォルフォードは心の中でそう呟くのであった。

００３・入試

「(いやー、それにしてもたくさん人がいるなー、これ全員受験者か。頑張らないとな)」
フリードリヒは内心呟きながら案内を見る。彼は初の王都という事もあり若干の緊張と楽しみを胸にしていた。
「……おい」
「(えっと、会場は……)」
「……貴様、そこをどけ!」
「(んー? 何処だ?)」
「聞いているのか!?」
「(……あ、ここか)」
「この無礼者が!」
フリードリヒはいきなり肩を掴まれ無理やり後ろを向かわされた。突然の事に驚くフリードリヒだったが肩を掴んだ男は更に怒鳴る。
「貴様! 先ほどから無視しやがって……! 俺はカート・フォン・リッツバーグだぞ!」
「……はぁ」

突然の事にフリードリヒは生返事しか出来ない。フリードリヒもロンダキアの学院に通っていたが皆フリードリヒの事を知っていたため気さくに話しかける人はいてもこのような態度を取る人物は初めてであった。
「何だその返事は！俺はリッツバーグ家の嫡男だぞ！」
「……はぁ」
「き、貴様ぁっ！」
「（え？なんなのこいつ？王都ってこういう奴しかいないの？）」
そう思い周囲をちらりと確認すると何人かの受験生は顔を青くしてこちらを見ていた。他はただ驚いてるのみであったが。
「……そこまでだ」
すると、カートの後ろから声が聞こえてきた。周りもざわつきその者に道を譲る。
「学院において権威を振りかざし他人を害する事は優秀な魔法使いの芽を刈り取る行為であり、これを破った者は厳罰に処する。学院の校則ではなく王家の定めた方であったはずだ」
「……！あ、貴方は……！」
「……（確か王家の……）」
「それともまさか、先程の発言は王家に対する翻意か？」

突然現れた男の言葉にカートは先ほどまでの勢いを無くし頭を下げている。
「い、いえ！決してそんな事は……」
「ではなぜ私の従兄弟にその様な言葉をかける？」
「い、従兄弟!?まさか……！」
カートは驚いたようにフリードリヒを見る。そこでフリードリヒはまだ自分の挨拶をしていなかったことに気付き改めて挨拶をした。
「お初にお目にかかります。アウグスト殿下。私はフリードリヒ・フォン・ゼスキア。ゼスキア公爵家嫡男にございます」
「ゼス、キア公爵、家……！」
カートは完全に先ほどまでの勢いをなくしその場に崩れ落ちた。ゼスキア公爵家は現国王の弟が建てた分家であり世界中の技術の最先端を行く家である。彼の領地の周辺に限れば王家よりも影響力を持っている程だ。
「カート、だったか？まぁ、こちらも案内板の前にずっと立っていたわけだし両者悪いところがあったという事でここは不問にするという事で、ね？」
フリードリヒはカートに笑顔で言う。その言葉にカートは壊れたようにコクコクと何度も頷くことしか出来なかった。

カートは直ぐに復活するとその場を離れたがフリードリヒは改めてアウグストに挨拶をする。
「先ほども名乗りましたがフリードリヒです」
「アウグスト・フォン・アールスハイドだ。そちらも堅苦しい挨拶はしなくていいぞ。家は違えど従兄弟に代わりはないからな」
「そう言ってもらえると嬉しいよ」
そう言って二人は握手をする。
「もう少し話したいところだが試験が始まってしまうからな。続きはまた今度だな」
「そうするか。ではお互いの健闘を祈って」
「……ああ」
そう言うと二人は学院へと入っていった。
試験は筆記と実技の二つありフリードリヒは筆記の試験を確かな手応えを感じ実技に挑んだ。
「では一人ずつ自分の得意な魔法を見せてもらいます！目標は設置してあるあの的！破壊できれば良し！出来なくても練度が基準に達していれば良し！では一人目！」

「はい！」
試験監督の言葉を聞き早速最初の一人目が前に出た。
「全てを焼き尽くす炎よ！この手に集いて敵を撃て！ファイヤーボール！」
一人目の人から放たれた火球は真っすぐに進み的を破壊するまではいかなかったがそれなりの威力を出していた。その様子に思わずフリードリヒは感心する。初手からそれなりの実力者の魔法を見ることが出来たのだから。
ふと、フリードリヒは隣の青年を見る。青年はかなり驚いており焦っているようにも見えた。
「（想像以上の高レベルだったとか？）」
ふとそう思うもそれにしては違和感があり思わず考察してしまう。
「次の人、前へ！」
「ん？俺の番か」
そんな事を考えている内にフリードリヒの番となった。彼は適度な緊張感を持ちながら前に出ると右手に炎の球体を生み出す。
「!?今無詠唱で……！」
他の受験生が驚く中フリードリヒは火球を前面に打ち出す。一人目の人より早く到着し的にぶつかり破壊した。

「す、すげぇ！的を破壊した……！」
「それどころか無詠唱だと……！」
「これが実力者……！」
「静かに！まだ一人残っています！」
　驚く三人の受験生に試験監督が注意をしている中フリードリヒは不満げであった。
「（やっぱり魔法は攻撃よりも後方支援の方が向いてるな）」
　そうしていると最後の一人の番となる。フリードリヒ他皆が見守る中その青年はフリードリヒと同じように無詠唱で生み出した。
「へぇ」
　フリードリヒは思わずと言った具合に声が漏れる。想定以上の実力者であった事に驚いたのだ。そして魔法が放たれ的に当たると、
　大爆発が起きた。
「……は？」